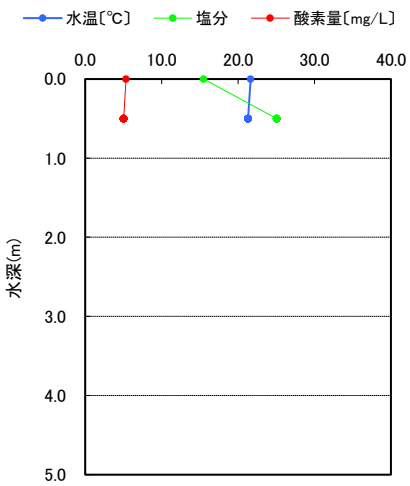
令和3年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

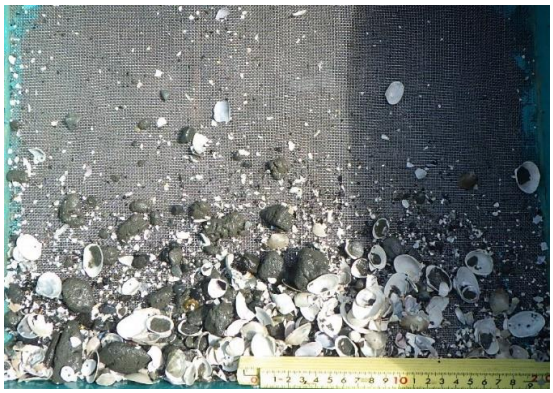
地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	令和3年5月24日　8:33　～　9:17

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

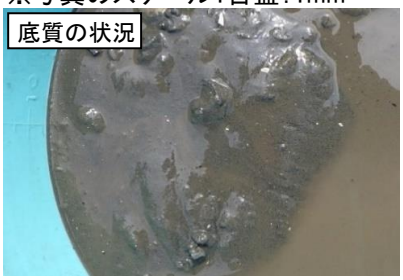
多摩川河口から1.5km付近の浅場で調査を行った。
水深が1m程度とやや深いため、船上からスミスマッキンタイヤ型の採泥器を用いて採泥した。



底泥はほとんど1mm目合のふるいを抜けてしまい、貝殻片と粘土の小塊が残った。

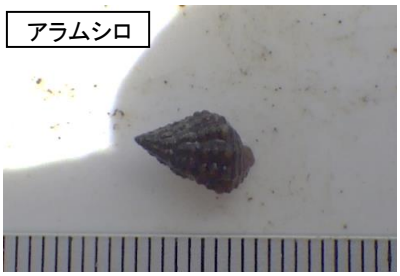
※写真のスケール1目盛：1mm

底質の状況



底質は細砂で、シルト（柔らかい泥）が少し混じる。

アラムシロ



殻高15mm程になる。殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。干潟から水深3mの砂泥底に生息する。魚や貝の死骸を食べる性質があり、「海の掃除屋」と呼ばれている。

紐形動物門

「ヒモムシ」と総称される動物群で、文字通り、紐状の生物であり、とてもちぎれやすい。肉食性で生きた多毛類などを体内に収納している吻を伸ばして捕食する。

チロリ属

体長10cm程になるゴカイの仲間。4つの鋭い牙（顎）がついた吻（ふん）を『チロリ』と出して、干潟の小動物を捕らえる。写真の個体の吻は、体内にしまい込まれている。

ミズヒキゴカイ

砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。名前の由来は、鰓と触手を水引（祝儀袋等に用いられる飾り）に見立てたもの。写真の個体は鰓が切れている。

アナジャコの巣

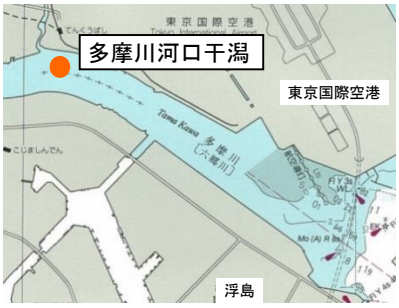
アナジャコは干潟に深い巣穴を掘り、内壁を固めるため入口部分のみが形を留めて採取された(本体は穴底深くにおり採取されなかった)。この巣穴はハゼ類や甲殻類等の隠れ家にもなり、干潟生態系の多様化に貢献している。

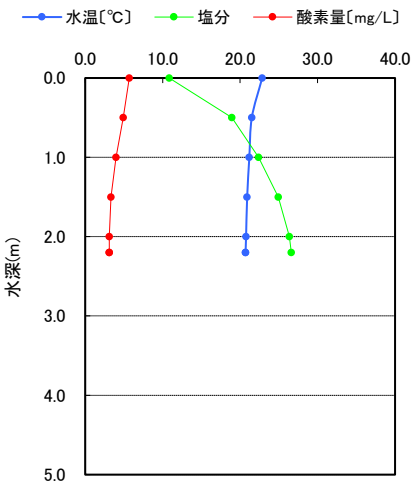
令和3年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和3年5月24日　9:52　～　10:15

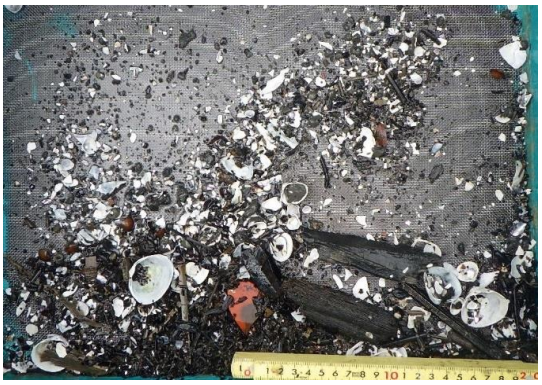
＜調査地点＞





＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川左岸側（東京都側）の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。護岸工事が終わり、土手の一部が階段になっている。



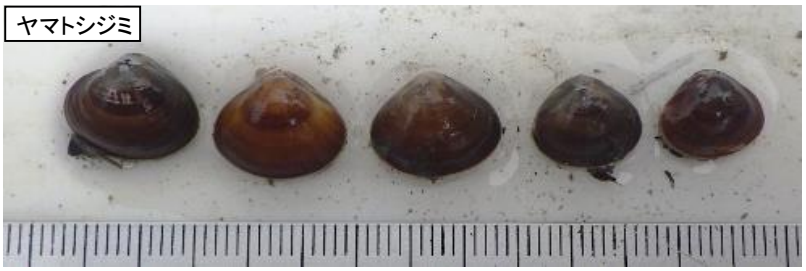
貝殻や植物片のほか、ゴミなど様々な夾雑物が交じる。

※写真のスケール1目盛：1mm

底質の状況

底質は砂が主体の固めの泥であった。

ヤマトシジミ



殻長4cm程になる。汽水域にのみ生育するため、河口域に生息するものは出水などの影響を受けやすい。一昨年の台風の影響からか昨年の6月及び9月の調査ではそれぞれ1個体しか確認されなかったが、今回は5個体以上出現し、回復傾向にあると考えられた。

紐形動物門

※解説はSt.31を参照。

ムロミスナフシナナフシ

体長2cm程になる、フナムシに近い仲間。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。

ヤマトオサガニ

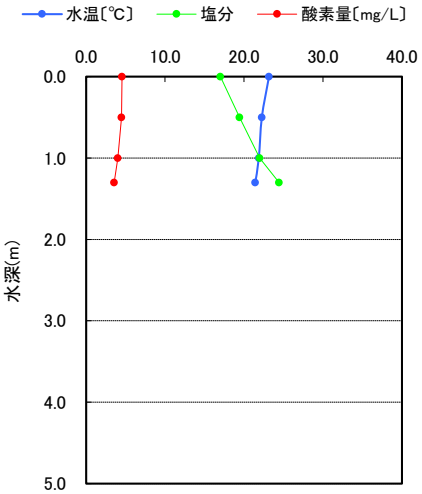
甲幅4cm程度になり、柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。干潟の代表的なカニで、鳥類にとって重要な餌になっている。

令和3年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和3年5月24日　10:32　～　11:10

＜調査地点＞



※写真のスケール1目盛：1mm

＜底質状況、底生生物出現状況＞

羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、岸から歩いて入ることはできない。

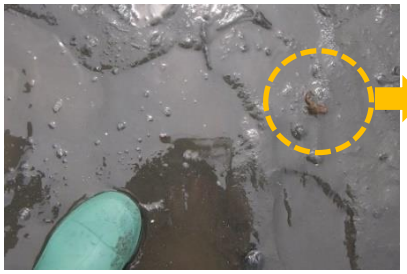
ふるい上には様々な種類の貝殻片が多数残った。

底質は固めの細砂であった。

砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。名前の由来は、鰓と触手を水引(祝儀袋等に用いられる飾り)に見立てたもの。

有機物の多い底質を好む多毛類。イトゴカイ科の仲間は疣足が発達せず、剛毛も小さいなど特徴に乏しいため種の同定が難しい。

※解説はSt.31を参照。



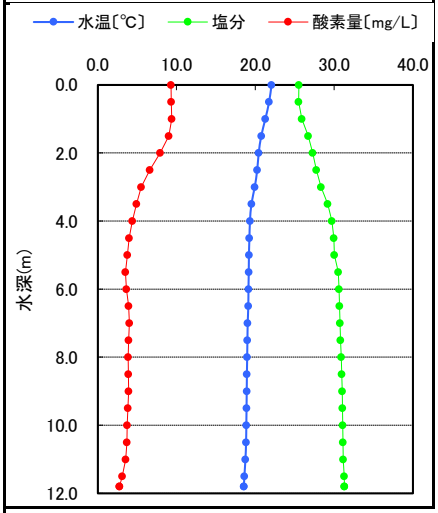
採取場所の付近で砂上にはマメコブシガニが歩いていた。東京湾の干潟に多く生息する小型のカニで、通常褐色の目立たない色をしているが、色彩変異が多い。コブシガニの仲間は、体は丸く歩脚が小さいため、前後に進むことができる。**※調査対象外**

令和3年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	令和3年5月24日　11:53　～　12:20

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

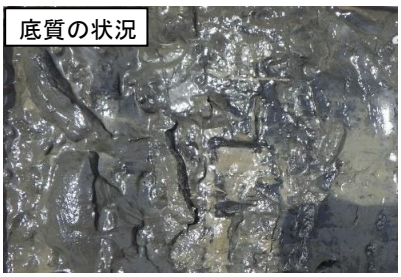
東京港フェリーターミナルの正面で採泥を行った。航路であるため、水深は12mと深い。海底付近の酸素量は2.8mg/Lと貧酸素の傾向が見られた。（貧酸素状態：2.0mg/L以下※）。

※出典：貧酸素水塊速報

ふるい上には、少量の貝殻片が残った。

※写真のスケール1目盛：1mm

底質の状況



底質の性状はシルトで、クリーム状でとても柔らかい。

泥臭の確認

採取した底泥の臭気を確認すると、微かに硫化水素臭（腐った卵のような臭い）がした。

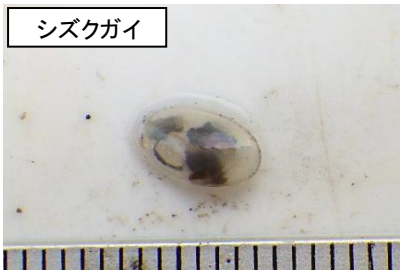
シノブハネエラスピオ

東京湾の内湾部で多くみられる多毛類の一種で、3対の鰓がある。貧酸素環境に耐性があり、有機汚濁指標種となっている。

キセワタガイ

体長4cm程で、内湾奥の干潟周辺から水深100mの砂泥底に生息する。一見、貝殺が見あたらないため貝とは違う生物に思えるが、半透明の薄い半球状の貝殺が内在する。肉食性。

シズクガイ



東京湾では代表的な汚濁指標種。内湾潮下帯の軟泥底に生息する。貧酸素耐性があり、無酸素状態でも水温25℃であれば1日間生存できる。

オウギゴカイ

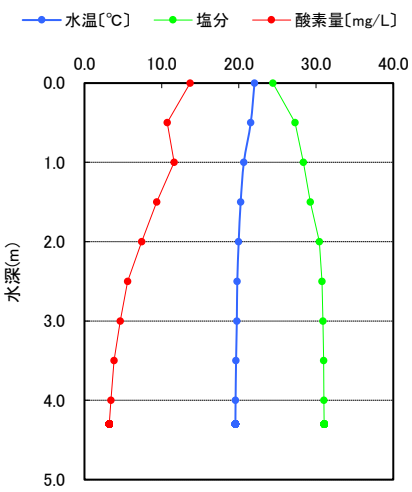
体長20cm以上になる大型のゴカイ類。東京湾の泥底～砂泥底では、貧酸素状態の期間を除き、普通にみられる。

令和3年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲（荒川河口）	調査年月日	令和3年5月24日　12:45　～　13:20

＜調査地点＞

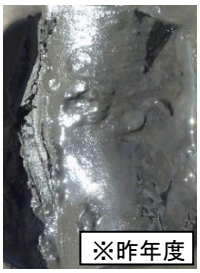


＜底質状況、底生生物出現状況＞

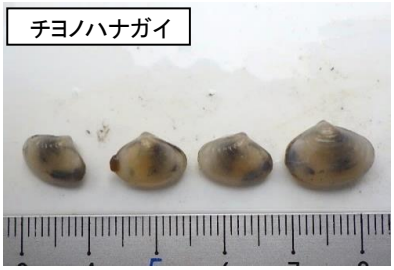
荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は5.3mであった。
すぐ横は東京ディズニーリゾートである。

ふるい上には貝殻片と植物片が残った。植物片は昨年度秋の調査時よりも少なかった。

※写真のスケール1目盛：1mm

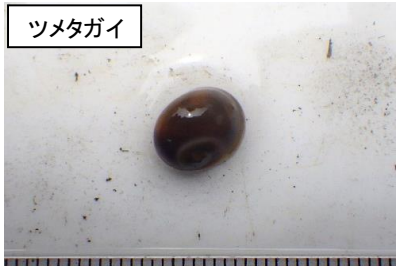


一昨年度までの同調査地点の底質は細砂であったが、一昨年の2度の台風の影響により昨年度の調査ではシルト主体へと変化しており、生物相も異なっていた。今回もシルト主体となっていたが、昨年度に比べると夾雑物の植物片が減少していた。本地点では今後の底質や生物相の回復過程が注視される。

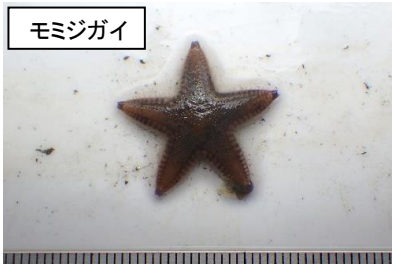


殻長1.5cm程の二枚貝で、殻は非常に薄いため、もろく壊れやすい。シズクガイと同所的に出現することが多い。貧酸素水塊でも酸素がある期間に短期的に発生することが知られている。

本種も貧酸素環境に耐性を持ち、本来殻の色は白いが、貧酸素環境では硫化物により殻が黒ずむ。漢字では「本美之主貝」と書き、「美之主」はヴィーナスの当て字でかつて本種がVenus属に分類されていた名残である。



砂泥底の浅海に多く生息する、中型の巻貝。肉食性で、やすり状の歯舌でアサリ等の殻に穴を開け、中の肉を溶かして食べる。砂浜等でしばしば見つかる、1mm程の丸い穴の開いた二枚貝の殻は、本種による捕食痕である。



体の中心から腕の先までの長さが9cm程になる中型のヒトデ。砂泥底に生息する。上側（口がない側）は灰青色や灰褐色、赤褐色など多様な色を示す。